

2. 管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの考え方

1) 管理栄養士・栄養士の期待される像（キャッチフレーズ）

「栄養・食を通して，人々の健康と幸福に貢献する」

管理栄養士・栄養士に共通して期待される像を，明瞭簡潔に表現するキャッチフレーズとして定めた。栄養学を学術的基盤とし，栄養・食を手段として，さまざまな人々の健康はもとより，より広義の well-being に寄与する専門職であることを，明瞭簡潔に表現した。

管理栄養士・栄養士の基盤となる学術は栄養学である。医師においては医学が，看護系人材においては看護学が，薬剤師においては薬学が基盤となる学術であることと同様である。したがって，本モデル・コア・カリキュラムでいう栄養学は，さまざまなライフステージおよび健康状態にある人々の栄養の営みを対象とし，ヒトに関わる領域（栄養生理学，栄養生化学など）も，食品に関わる領域（食品学，調理科学など）も，その関係性や実践に関わる領域（栄養疫学，栄養教育など）も，すべて含む広義な概念として栄養学をとらえ，モデル・コア・カリキュラムを作成した。

2) 管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの概念図

管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの全体構成を以下の通りとした。

- A 管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力
- B 社会と栄養
- C 栄養管理の実践のための基礎科学
- D 食べ物をベースとした栄養管理の実践
- E ライフステージと栄養管理の実践
- F 疾病と栄養管理の実践
- G 1 給食の運営に関する総合実習
- G 2 統合実習
- H 栄養学研究

これらの相互関係，および基礎教養科目や，各養成施設が教育理念に基づいて実施する独自の教育内容との関係を管理栄養士・栄養士共通の概念図として次頁に示した。

上部に，A「管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力」を位置づけた。管理栄養士に該当するものに★，栄養士に該当するものに☆を付け区別した。これらの資質・能力の獲得に関わる教育内容としてB～Hがある。左から右へ，基礎的な学修内容から総合的，統合的な内容へと学修が発展する。栄養士に該当する部分を左半分の太字破線枠で囲み，栄養士免許取得後に，現場での実践・卒後教育を経て，管理栄養士国家試験へと至る道筋を示した。栄養士では，D「食べ物をベースとした栄養管理の実践」が最も大きい割合で，E「ライフステージと栄養管理の実践」，F「疾病と栄養管理の実践」と小さくなるのに対し，管理栄養士では，F「疾病と栄養管理の実践」が大きな割合を占める表現とした。管理栄養士では，最終的に，G2の臨地実習を含む「統合実習」と，H「栄養学研究」の教育内容の修得をもって，体系的な学修となるようモデル・コア・カリキュラムを構成した。

管理栄養士・栄養士養成の栄養学教育モデル・コア・カリキュラム(平成30年度作成) 概要

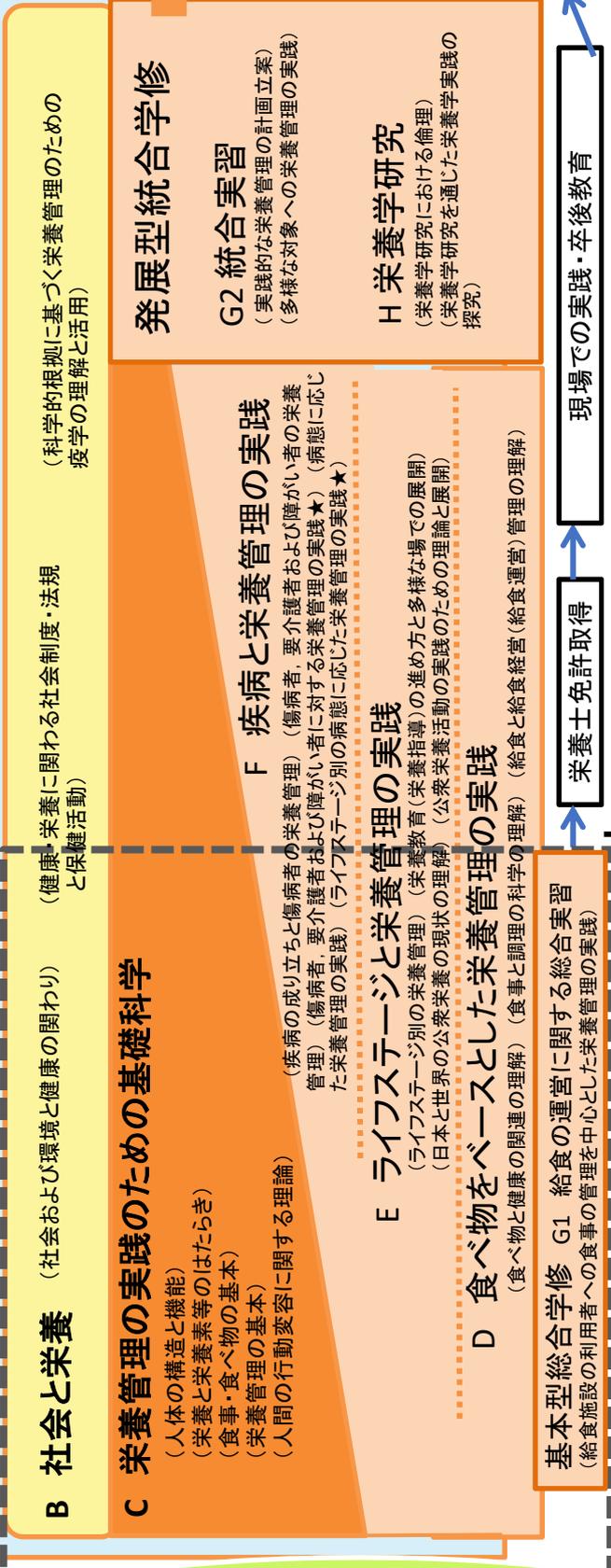
- 学生が卒業時まで身に付けておくべき、必須の実践的能力(知識・技能・態度)を、「ねらい」と「学修目標」として明確化
- 学修時間数の6割程度を目安としたもの
- 「管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力」として、ミニマム・エッセンスである項目を記載

「栄養・食を通じて、人々の健康と幸福に貢献する」管理栄養士・栄養士の養成

A 管理栄養士★・栄養士☆として求められる基本的な資質・能力

1. プロフェッショナルリズム★★☆
2. 栄養学の知識と課題対応能力★★☆
3. 個人の多様性の理解と栄養管理の実践★★☆
4. 社会の構造の理解と調整能力★
5. 栄養・食の選択と決定を支援するコミュニケーション能力★★☆
6. 栄養・食の質と安全の管理★★☆
7. 連携と協働★★☆
8. 栄養の専門職としてのアドボカシー能力★
9. 科学的態度の形成と科学的探究★★☆
10. 生涯にわたって自律的に学ぶ能力★★☆

栄養士法に基づく管理栄養士国家試験



基礎教養科目

各養成施設の管理栄養士・栄養士養成の特色ある独自のカリキュラム

- 各養成施設が教育理念に基づいて実施する、独自の教育内容(教養教育や、学生が自主的に選択できるプログラムを含む)
- 学修時間数の4割程度

3. 本事業における記述、用語について

1) 項目相互の関係

本モデル・コア・カリキュラムでは、項目相互の関係を示す記述を行った。

管理栄養士では、大項目ごとに他の大項目との関係を記述し、さらにB～Hは小項目ごとに学修のねらいの中で、他項目との関係がわかるように記述した。栄養士では、大項目または中項目ごとに、他項目との関係を記述した。なお、記述した項目間の相互関係は主要なものであり、すべてを網羅するわけではないことに留意されたい。

2) 用語について

本モデル・コア・カリキュラムで用いた主要な用語について、以下に解説を示す。

栄養管理

本モデル・コア・カリキュラムでは、管理栄養士が行う業務全般を「栄養管理」、栄養士が行う業務全般を「食事の管理を中心とした栄養管理」と表現する。ここで示す“管理”は、英語でいう **administration** の意味ではなく、対象となる個人や集団や組織に対し、適切なスクリーニングとアセスメントを行い、課題を明確にし、課題解決のための計画を立案、実施、モニタリング、評価するという一連のマネジメントサイクルに沿った活動の実践を意味する。

栄養・食

管理栄養士・栄養士の学術的基盤は栄養学であり、管理栄養士・栄養士が行う栄養管理では、当然のことながら、食事の計画、調整、提供を伴うことがほとんどである。したがって、栄養管理の手段として、食事・食品を扱う場合、或いは地域、国、地球レベルでの食料を扱う場合には、“栄養・食”という表現を用いた。

マネジメントサイクル

マネジメントとは、組織の目標を設定し、その目標を達成するために組織の資源を効率的に活用し、リスクの管理を行うことをいう。マネジメントサイクルは、マネジメントを行う際の手順のことで、人や組織が目的を達成するために計画を作成し、実施し、計画通りに実施できたかどうかを評価し、見直しを行って、その結果を次の行動計画に結びつける一連の流れをいう。マネジメントサイクルの代表的な例が、PDCA サイクルである。

栄養ケア・マネジメント

栄養管理において、人を対象に、栄養スクリーニング、栄養アセスメント、栄養ケア計画の立案、計画の実施、モニタリング、評価を行い、栄養ケア計画の見直しを行って、より質の高い栄養ケアの実践につなげるマネジメントサイクルのことを、本報告では栄養ケア・マネジメントと表現する。

NCP: Nutrition Care Process (栄養ケアプロセス)

アメリカ栄養士会が、栄養管理の質の改善をめざし、栄養管理の過程を標準化するため、4区分(栄養アセスメント、栄養診断、栄養介入、栄養モニタリングと評価)で手順を示したものである。栄養ケア・マネジメントの国際的な基準として提案され、活用されている。本報告では、F「疾病と栄養管理の実践」の中でNCPを基本とした学修を行うこととした。

コンピテンシー (Competency)

コンピテンシーとは、職務で一貫して高い業績を出す人の行動特性・行動様式と捉えられる。コンピテンシーは、その人の行動に表れている、または表すことができ、その能力・特性が成果に結びつくものである。本報告では、管理栄養士・栄養士としての専門的実践能力をいう。

リテラシー (Literacy)

リテラシーとは、元々は、読み書き能力、識字力を意味する。それが発展して、文字や絵、図表などで表現されたものを適切に理解し、解釈し、活用する能力のことをいうようになった。本報告にある情報リテラシーとは、目的に合わせて情報を収集・選別し、解釈して活用できる能力をいう。

アドボカシー (Advocacy)

アドボカシーとは、WHOによれば「ある特定の健康目標やプログラムに対する政治的コミットメント、政策支援、社会的な受容や制度的支援を得ることを目的に行われる個人的および社会的なアクションの総体」と定義される。WHOの「ヘルスプロモーションのためのオタワ憲章」の中で、アドボカシーは、ヘルスプロモーションの基本的戦略の1つとされた。本報告では、社会や組織を変えるための活動をいう。

3) 学修目標の表現

各項目の学修目標は、学修終了時に「できるようになる」ことを、できるだけ具体的な行為として表現した。ただし、知識とスキルの修得状況については、原則、以下の統一的な表現を用いた。

「説明できる」：学修し、理解した知識を他者に伝えることができる。

「概説できる」：学修し理解したが、他者に伝える迄に至らない。概要の理解に留まる場合。

「実践できる」：学修し、修得したスキルを実際に使うことができる。

4. モデル・コア・カリキュラムの趣旨と養成施設の教育における活用—今後の課題

1) モデル・コア・カリキュラムの趣旨

本モデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士・栄養士養成のための教育において共通して取り組むべきコアとなる内容を抽出し、各養成施設におけるカリキュラム作成の参考となるよう学修内容を列挙したものである。

もとより、養成施設におけるカリキュラム構築は、各分野の人材養成に対する社会的要請や学問領域の特性等をふまえつつ、各養成施設が建学の精神や独自の教育理念に基づいて自主的・自律的に行うべきものである。本モデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士・栄養士養成の充実と社会に対する質保証に資するため、学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の実践能力について、その修得のために必要な具体的な学修目標を、管理栄養士・栄養士養成施設関係者をはじめ、広く国民に対して提示することを目的として策定されたものである。

なお、本モデル・コア・カリキュラムについては、社会のニーズの変化、管理栄養士・栄養士に求められる専門知識・スキル等の変化に伴い、必要に応じて見直しを行い、改訂することが必要である。

2) 養成施設の教育における活用

各養成施設がカリキュラムを編成するに当たっては、学修目標だけでなく、学修内容や教育方法、学修成果の評価のあり方等も重要な検討課題となる。本モデル・コア・カリキュラムは、カリキュラムの枠組みを規定するものではなく、授業科目等の設定、履修順序、教育手法や実験・実習の組み立て等を含めカリキュラムの編成は各養成施設の判断により行うものである。各養成施設においては、カリキュラムの編成や評価の過程において、本モデル・コア・カリキュラムの学修目標を参考として活用することを期待する。

本モデル・コア・カリキュラムの策定に当たっては、最終的な学修目標はいわゆるコンピテンシーの獲得を目的とした記載とするとともに、管理栄養士養成施設における基礎教養分野を除く学修時間の3分の2程度で履修可能となるよう精選した。

各養成施設においては、本モデル・コア・カリキュラムが提示する学修目標を包括するとともに、特色ある独自のカリキュラムを含め総合的に構築することが期待される。

なお、栄養学およびその背景にある学問や科学・技術の進歩に伴う新たな知識や技能について、すべてを卒前教育において修得することは困難であり、生涯をかけて修得していくことを前提に、卒前教育で行うべきものを精査することが必要である。

栄養学教育においては、栄養学研究への志向を涵養する教育や、栄養学関係者以外の声を聴く等の授業方法の工夫など、各養成施設において特色ある取組や授業内容の改善に加え、これらの実現に向けた教職員の質の向上が求められる。具体的には、教育能力の向上、臨地実習を想定した教員の実践的能力の向上、担当する教育分野と合致した研究の推進などである。

また、栄養学的視点で科学的探究ができる人材の育成や批判的・創造思考力の熟成、専門職としての高い倫理性、職業アイデンティティの確立、研究や臨床で求められる情報収集能力、読解力の育成、対人関係形成能力の基礎となる、自らをよく知り、自己を振り返る内省、自己洞察能力の強化が求められている。これらの強化のためには、大学院修士課程における高度人材養成が、今後一層重要となる。今回の検討では、大学院に関しては、モデル・コア・カリキュラムの提示に至らず、現在、高度人材としての管理栄養士の主な就業先である5つの分野について、学修の基本、修得すべきコンピテンシーと、それらに必要な教育内容を例示的に整理するに留まった。既に社会では、AI、ロボット、ICT等の技術革新を積極的に導入した新たなサービス提供の検討が始まっている。大学院レベルの管理栄養士の養成については、こうした社会の劇的な変化にも柔軟に対応しながら、質の高い栄養管理を実践できる人材養成のあり方の検討が必要である。